

「試される母」

—近代における異常出生譚の受容と展開—

山田 巖子

はじめに

「女の本」と題してもよい様な本を、何とかして今一冊は残したいといふ念願を、久しい以前から私は抱いて居た。さういふ余計なお世話を、もう焼くには及ばぬと知つたことが、この書物を世に送るに当たつての、まづ大きな一つの喜びである。⁽¹⁾

敗戦後の一九四六年に、柳田國男は女性民俗研究会に「女の本 若き友におくる民俗学」という本を朝日新聞社から刊行させる。

ここで注目したいのは、戦前から女性の民俗学徒たちを育てていた柳田國男の、「女の本」への「念願」を「大きなお世話」と表現する感受性の問題である。柳田は早くから、女性の出産と子育て、文芸の管理、靈的な役割などに関心を持ち、積極的

に発言してきたが、ここでは、女性の問題を女性に返す、という姿勢が読みとれよう。⁽²⁾これは旅人よりは郷土人をその研究の上位に置き、当事者の問題を当事者が解決するための歴史研究をめざした柳田にとつては当然の論理であつたはずである。⁽³⁾

性差によつて生活経験に差が生じる領域では、聴き手の性差が、聞き書きの成否を分けることが少なくない。女性の民俗学徒を育てる必要を柳田が感じていたのは、この点が大きかつたと思われる。⁽⁴⁾

筆者はここでは、「出産」という話題を取り上げ、「口承」研究の視座から、「話し手」「女性」×「聞き手」「女性」という組み合わせが、何を可能にしたのか、また、その限界はどこにあるのか、ということを述べてみたい。ここで取り上げる「出産」は、口承文芸研究にはおなじみの「異常出生」のモチーフを有するものである。また、この話が、優生保護や母性尊重といった話し手が生きた時代の思想と、どのような関係にあつたのかについても述べてみたい。

一 「試される母」

近世末から近代にかけての出産にまつわる制度、技術、心意の変化については、多くの研究の蓄積がある。⁽⁵⁾これらの問題を、女性の研究者たちは、女性の身体をめぐる「権力」の問題として捉え直してきた。

一九世紀の日本の産科書を分析したスーザン・L・バーンズは、妊娠中の「胎教」と「保養」といった思想を受容した結果、妊娠と出産は「単なる生物学的事実ではなく、道徳的秩序によって構成された世界のなかで、女性の位置が決定され告知される裁決の瞬間」になったと述べている（バーンズ 一九九二）。本田和子のことばを借りれば、「生まれてくる子供の身体は、この時、母となる人の成績表として機能する。その小さな身体に母なる人が妊娠時の禁忌を守ったか否かを刻印されて、一種のテキストとして出現する」のである（本田 一九九三）。

生まれ児によって母親の正邪が試されるという思想は、近代以降の、見世物の口上などにも見いだすことができる。筆者はケツカイと呼ばれる毛だらけの子どもと称する見世物（その正体は南洋の猿）の口上の中に、母親のプランバシーを暴くかのような語り口や、「不倫な婦人が生むところの因果児」といった説明があることを挙げ、口上の上で子どもは母親の道徳的退廃の象徴として示されていることを述べたことがある（山田 二〇〇三）。

日本では明治一七年に高橋良男の『日本人種改造論』が出て、明治三〇年代末から四〇年代には優生学的な議論がさかんになる。ケツカイの見世物は、同時代の思想、すなわち「優生思想」「人種改良」「衛生的な出産」「健康な子ども」などのすべての陰面となっており、多義的で暗示的なものとなっていた。⁶⁾

生まれ児によって、母親の正邪が試される、といった話型が

プロパガンダにも用いられることがある。『山梨日日新聞』昭和一五年八月二五日の記事によれば、戦時下で自粛していた火祭りを、規模を小さくして執行したいと願う浅間神社の氏子たちは次のような論理を示したという。祭神木花咲耶媛命が、夫から貞操を疑われたため、産屋に火を放ち、「自若として無事を男子を挙げたという古事記の物語りを受け継いで」「日本女性の強く正しい事を伝える縁起から執行ふ火祭りだけに」と戦時下での執行の正当性を主張した（久野 二〇〇四）。この神話では、異常な状況での、正常な出産が「神の子」（夫、邇邇芸命の子）を産んだ証明になり、母の貞操を保証することになった。この神話の引用は、祭祀の執行が時局にとつてむしろ好ましいことを主張するために住民が行ったものである。

筆者はここで、「生まれ児によって母の悪が露見する／生まれ児によって母の正しさが証明される」といった話を仮に「試される母」の話柄と名付けておきたい。

二 「異常出生譚」とは何か

先の、火中で分娩したという木花咲耶媛命の故事は異常出生譚であるが、毛だらけの子どもが生まれた、という見世物の口上もまた異常出生譚に仕立てられている（「異常」とはここでは、それぞれの時代や社会の文脈で、稀少なゆえにそのようなレッテルを貼られた存在を指し、何らかの価値づけを伴うものでは

ない)。

筆者は異常出生譚とは、次の四つの要素のいずれかを含む物語であると捉えている(山田 一九八七)。「A 懐妊の異常」「B 妊娠中の状況の異常」「C 出産の状況の異常」「D 生まれ児の異常」。

「母の異常」と「子の異常」のどちらに力点を置くかで、同じ話柄でも多様な解釈が生まれてくる。柳田國男は、昔話の異常児誕生譚を「小さ子神」との関連で捉えていたが、子育て幽霊や弁慶、老子の説話については、「女は幾人もの子を持つべきであるのに非凡の子を得ん為には、其全力を費やしてはねばならなんだ」と、非凡の子を持つための尊い母の犠牲を強調している(柳田 一九二〇)。

異常出生のモチーフは、母性を語る美談、貴種の誕生を説く説話から不倫の噂まで、自在に姿を変えて引用されていくといえる。

三 世間話という方法

ここでは「異常出生譚」として、世間話の中で聞くことのできるケツカイと呼ばれる子どもの出生の話題を扱う。ケツカイとは先に述べた近代以降の見世物の名前であると同時に、一四五四年の古辞書『撮壤集』「病疾類」に「血塊ケツクワイ」とあるのははじめ、主に産科書の中で「妊娠と紛らわしい病気」として知られてきた(山田 二〇〇〇)。それらが、唱導の話材や随筆、

読み本で扱われる時には、より「劇的」なものに変化していくことも既に述べた(山田 一九九九)。

現在、筆者の調査を含め、既に報告があるケツカイの口承の資料はおおよそ明治二二年から大正一四年に生まれた男女によって語られている。それらの話し手の話は、見世物のケツカイの影響と、「瘀血」「古血」などと同じカテゴリーで扱う産科書の「血塊」の影響を受けながら、ある幅の中に収まる形で多様な解釈を行っていた(山田 一九八五)。

筆者はかつて世間話という方法を問う論攷の中で、調査という括りをはずした時に、聴き手はどのような資格で話を聞いているのか、と問うたことがある(山田 一九九七)。ここで筆者の性別が「異常出生」という話題を聞く時に、談話の場でのようなことを可能にしたのか、について考えてみたい。

ケツカイという話題について、潮地悦三郎、井田安雄、神野善治、榎本直樹、堀内真らの男性も調査しており、その中のいくつかの話は、調査報告書などに報告されている(井田 一九九〇、榎本 一九八九、潮地 一九七九、堀内 一九八八)。またこの話柄は男性も知っており、女性だけが知る話題ではなかった。しかし現在知られている八二例の報告のうち、話者の性別が分かっているものは、女性が四三例、男性が十一例と圧倒的に女性の話し手が多い。

ここではまず、女性である筆者が男性から聞いた話を検討してみることにはしたい。筆者は五人の男性からこの話を聞いてい

る。

東京都板橋区出身の明治三十七年生まれの男性は、体の中に古い血が残っていたのが、集まって子どもの形をして生まれることがあり、それがケツカイというもので、何か悪いことをするらしい、という。山梨県富士吉田市浅間町の大正五年生まれの男性は、「ケツカイとは、月のものが異常に発達して、それがいくつもいくつも固まったものを産むわけだ。動物みたいで逃げるとか何とか言ったあけど。早くとつつかまえて埋めるとか殺すとか聞いたあけんどな」と答えた。これらは「古血」や「瘀血」の知識が入りこんでいるケツカイの話であるといえる。

南都留郡忍野村出身の大正一四年生まれの男性は、ケツカイという「猫のようなネズミのようなもの」が生まれると、すぐに出て行ってしまおうといい、そうすると親の命が危ないので、殺さなければならぬ、と言った。また、そのためにお産の時には人がついていなければならぬと聞いたという。富士吉田市新屋の明治四〇年生まれ男性は、「葡萄のようなもの」が生まれ、「火の中に転がり込もうとする」ので、そうすると親の命が危ういため、産室に槐の木を用意しておいて殴って殺すと語った。この二人は、出産の際の用心でこの話をしめくつた。

大正一二年生まれの上吉田の男性は、ケツカイの話を工場仲間から聞いたと言っていた。葡萄のようなものが生まれて、すぐに跳び出し、水を飲むと母親の命が危ないので殺してしま

う、と語っていた。男性の話し手たちは、この話題を家族から聞くことはなかった。

しかし、女性の話し手に目を転じてみると、母娘という経路の伝達を見ることができる。榎本直樹氏は埼玉県大里郡大里村（現熊谷市）の大正二年生まれの女性から、ケツカイの話を聞き、この女性はこの話を母親から聞いていた。

（お産をするときは）冬でも蚊帳つつとくもんだつて。「なんで、おっかやん」つて聞いたたら、そうしたらね、「なにが生まれるがなわかんね工から、蚊帳つつとくんだ」つて。そういう話、親に聞いたつたよ（榎本 一九八九）。

ここでは「異常」への用心として母から娘にこの話が伝わっていることが分かる。

群馬県群馬郡新田町市野井（現太田市）の明治二六年生まれの女性は、ケツカイは生まれるとすぐ水瓶の水を飲むので、水瓶の蓋をしめておかなければならない、という。この女性は、姑に風呂に入るたびにこのことを注意されたという（井田安雄氏ご教示）。

ここには女性同士の「危険を知らせる情報伝達」としての世間話の機能を見ることができるといえる。

筆者はケツカイの話群が、異常への対処法を示す語り口を備えていることが多いことに注目してきた（山田 一九八五）。また、これらの「語り口」では、「あり得るもの」として「異常」が語られていることにも注意を向けてきた（山田 二〇〇三）。

ケツカイの話の中には妊娠中の母親の行動にその原因を求めたり、「未婚の娘が子どもを産みたい産みたいと思っていると生まれる」(群馬県旧群馬郡新田町 井田安雄氏ご教示)など、暗に婚外の出産であることを暗示したりするものもある。また、親の罪業や家の差別と結びつけるものもある(山田一九九七)。

しかし、これらの話は「産む立場」の女性たちが、女性である筆者に語るときには、それほど強調されることはなかった。

筆者は世間話には「体験」のストックとしての側面があると考えてきた(山田 一九九七)。「異常出生譚」は、女性たちの世間話の中では、単なる「奇事異聞」ではなく、「危険への心がまえ」として語られてきたと考えられる。そのような情報伝達の中で、「危険を共有しあう仲間」としての結びつきを強めていったのではないか。

筆者もまた、ケツカイの話聞いた後に、「そういう変わったものが出た人も昔あるから、そだから、お産の時には大勢近寄らせるじゃない」(富士吉田市白糸町 明治三六年生まれの女性)とか、「産んでみなければ、何を産むか分からない、とこういうことを言うわけ」(富士吉田市大明見 明治三九年生まれの女性)とか教えられてきた。

調査当時、筆者は若い女性であり、話し手たちにとっては筆者は孫の世代にあたった。筆者にとっては「調査」であったものが、話し手にとっては、「年下の女性」への警告や忠告であっ

た場合もあり得る。

インフォーマルな情報伝達である世間話は、「時代」の思想に影響を受ける側面と「時代」の思想を対象化できる側面がある。「試される母」の思想はケツカイを語った話し手たちにとっては同時代の思想であったが、若い女性である筆者への話には、その部分が強調されることはなかった。言いかえると、この話を語った女性たちは、このような規範を内面化して語ることはなかったといえる。

まとめにかえて

人々によくなじみ人口に膾炙した「異常出生譚」のモチーフは、「健康な子ども」「望ましい出産」などの陰面となり得ると同時に、「母の犠牲」「母性の勝利」などのプロパガンダにも利用され得るものであった。これらの話は、性差によって受容の仕方に差異が生じるもののうちの一つであろう。もちろんそれは育った時代や階層など、いくつもの変数を入れて考えるべきことでもある。

「口承」研究の中では、話し手と聞き手の関係性に注目して、どのような関係性によって聞き取りが可能であったのか、という「問い」が成立する。その中に「性差」の問題は入り込んでくる。しかし、「性差」は「話し手」と「聞き手」の属性の一部に過ぎない。聞き手の属性の中で何を優位とするのかは、話し手が

決めることである。また、どのような属性が優位になるかは話題によっても変化する。さらには、どのような話をどの程度まで語るかは、属性以上に関係性のつくり方が問題になろう。

しかし、好みな話題や「怪談」と遇されてきたケツカイの誕生という話題を、話の場に戻してみても、女性たちにとってこの話が何であったか、と問うことが可能であったのは、聞き手の「性」に規定されるところが大きかった。

筆者はこれらの世間話の聞き取りの際に、女性たちの群れに「新参者」として紛れ込ませてもらったことがある。また、話をしている途中に話し手が、ふと、娘や仲間に話すように話してくれたこともある。これは〈話し手「女性」×聞き手「女性」〉という組み合わせが可能にしたことの一つであろう。

世間話研究においては、女性の聞き手は、女性の「話」のネットワークに注目し、「話題」によって同性が結びついていく様子を確かめることが大切であろう。それと同時に、その断絶をも見極めていくことが必要である。「話題」を共有しない層へ着目することで、性差以外の属性に目を向けていくこと、が今後求められていくといえる。

注

- (1) 柳田國男「序」〔女性民俗研究会編 一九四六〕
- (2) 育児は女性だけの問題ではないが、それが女性の責任に帰される傾向が、近代以降強まった〔沢山 一九八七〕。民俗学の研究が、固定された項目にのみ女性への注目が集まっていたことに対しては、坪井洋文をはじめ多くの批判がある〔坪井 一九八五〕。
- (3) しかし、この「序」自体のやや皮肉なトーンは、「大きなお世話」という表現が、一通りの意味ではないことも感じさせる。
- (4) 柳田はまた女性の語り手の心情をくみ取って聞く、女性の民俗研究者の出現を期待した〔山田 二〇〇七〕。
- (5) 〔首藤 一九九一 a b〕〔沢山 一九九八、二〇〇五〕〔落合 一九八九〕〔天田 二〇〇七〕など。
- (6) 筆者は〔山田 二〇〇三〕において、見世物がもてはやされた一九二〇年代には懐古趣味とエロ・グロ・ナンセンスが時代の嗜好であったことにも触れている。

参考文献

- 井田安雄 「人生儀礼」『新田町誌』第五巻 一九九〇年
榎本直樹編 『埼玉県大里郡大里村の口承文芸』一九八九年
私家版

太田素子 『子宝と子返し』近世農村の家庭生活と子育て』

二〇〇七年 藤原書店

落合恵美子 『近代家族とフェミニズム』一九八九年 勁草書房

沢山美果子 「近代的母親像の形成についての一考察―

一九九〇～一九〇〇年代における育児論の展開―」『歴史評

論』四四三号 一九八七年 校倉書房

同 『出産と身体の近世』一九八九年 勁草書房

同 『性と生殖の近世』二〇〇五年 勁草書房

潮地悦三郎 「人生儀礼」惣右衛門の民俗』戸田市史民俗調査

報告書第四集 一九七九年

首藤美香子 「産む」身体の近代―江戸中期における産科術の

革新―』『現代思想』一九卷三号、一九九一a

同 「母子関係性の誕生―江戸中期における産科術の革新―」

原ひろ子・館かおる編 『母性から次世代育成力へ―産み育て

る社会のために』新曜社、一九九一b

女性民俗研究会編 『女の本 若き友におくる民俗学』一九四六

年 朝日新聞社

坪井洋文 「序章」宮田登他編 『日本民俗学大系 家と女性』

一九八五年 小学館

バーンズ／スーザン・L 「権力・知・再生する身体―近世日本

の産科書をめぐって―』『みすず』三六八号、一九九一年

久野俊彦 「付録 第二節」富士吉田市教育委員会歴史文化課

編 『吉田の火祭り』二〇〇四年

堀内真 「口承文芸」『鳴沢村史』第二卷 一九八八年

本田和子 「情報としての「母子」の発見」『国立歴史民俗博物

館研究報告』第五四集 一九九三年

柳田國男 『赤子塚の話』一九二〇年 玄文社 『柳田國男全集』

3 一九九七年 筑摩書房

山田巖子 「産怪の伝承―ケツカイの諸相―」昔話研究懇話会

編 『昔話―研究と資料―』一四号 一九八五年 三弥井書店

同 「異常児誕生の伝承―昔話の異常児誕生譚」『東洋大学大学

院紀要』第二三集 文学研究科 一九八七年 東洋大学

同 「異常児誕生をめぐる世間話―ケツカイの伝承―」社会民

俗研究会編 『社会民俗研究』第一号 一九八八年（飯島吉晴

編 『日本文学研究資料新集一〇 民話の世界―常民のエン

ギー』一九九〇年に再録）

同 「世間話と聞き書きと」『岩波講座日本文学 第一七卷』

一九九七年 岩波書店

同 「産室の外へ―ケツカイの行方―」世間話研究会編 『世間

話研究』第九号 一九九九年

同 「産科書の中の「血塊」」世間話研究会編 『世間話研究』第

一〇号 二〇〇〇年

同 「見世物としてのケツカイ」弘前大学国語国文学会編 『弘

前大学国語国文学』第二四号 二〇〇三年

同 「聴く力―丸山久子の昔話調査―」日本口承文芸学会編 『口

承文芸研究』第三〇号 二〇〇七年

（やまだ・いつこ）／弘前大学